

物
志

中村俊定文庫
文庫 18
226



一、
...の
...
...
...

Handwritten notes on a piece of paper pasted onto the right page of an open book. The text is written vertically and includes:

OK
+
12-18

There are also some faint red markings and a blue stamp on the paper.

妻夫と他少何もそと申ふし
るは成るともいふやまのた種
のいふ成ふよりいふて鴉子と
見えぬとすいふんふあはふ
わいふは何うもこのいふは
とつて九内の中は二口を
下あふひわんさふとふく
ふあふひわんさふとふく

一こ坂とてまゝにふらふらと
いふとよふ物路のたゞしとて
めとて世の〜乃山とてはるのた
すてぬはの女あも〜とて
のたのた〜とて
とてぬをた〜とて
たまてた路もあつて
の〜とて 眠らん〜とて

丁筋筋すこのたのた
い〜とて
目〜とて
たのた〜とて

おの

とて保甲とて



悼

師の思ハ世世はるる三夜栗
 真如乃月弦秋を疎文
 明安んと虫毛習字を立兼之
 引 盃 下 丁 と 十 人
 家こみ彌一烟の櫛小柳
 半切紙を唇て志免

獨歩卷

超波
 有佐
 桑楊
 蓮谷
 鳳翠
 蝸牛



聖日毛糸練をさそぬ多し子漢
修徳地後の、言もあうら
雛形乃左右を結るの、小津自
智身毛知耳なり五万石
舊羽玉と詠む思答もふふ物
初瀬詣下下早と振袖
門くま塔笠管のうらまふ
と交れ喉氣南うら

地北

冠文菜其其異貞左
之里也耕畔川仙人

造営の百々鳩もふ拂ふ通ふ
花はあらしハ拍の引一と
つらさ一綴糸月を午の刻
印も一あまの約々原色
盛砂の形もその供片荷苑
十家無うをくは華経の文字
姉妹是とありあをを昔はし
知つて海一と好ゆ守のほまら

山其有其志緑始可
郭其條林蒼静水葉容

李良し〜ん〜いお〜
きか〜鉛と羅むの〜
惣髪と朱鞘と皮を懸〜や
さ〜り〜き上子物時雨餅
清水の石段階横に付ケ
月〜色向ふ日向句当
唇〜短い唇子低い唇
あ〜起風を〜い〜小波〜菜

其英
至的
素史
黒己
其道
其樹
李畔
吟國

ウ

壁ホ小堀〜れ〜堀ハ轉〜り
鳴〜ぬ鼓を補しよ打
抜〜く交又酒印たあ〜る〜ら〜ま〜つ毛
休〜け〜た〜れ〜塔の下陰
こと〜き〜も妙と唱〜る〜むの夏
精進 打ちを落〜く〜能〜也

磷
来的
鶴歩
素雉
貞陸
素夫

おはゆたせ
貞佐の信作

享保十九甲寅九月十二日誰見
貞佐子名あり信作とあるの
〜を志は〜くもあ〜ぬを平日
のおもひふな神や

奈良し〜ん〜ん〜ん
きふり鉛と羅むのむ
惣髪と朱鞘と皮色思ふ
きりきり上子羽時雨餅
清水の石子階横は付ケ
月へ色向ふ日向勾当
唇も短い袖も低い袴
あ〜花風をま〜り〜り

老の時の
あはれ
ゆき

あはれ
真佐子の
信作

ウ
壁も小堀も水も塔へ
鳴るぬ鼓を補しよ打
抜く交又酒印たあきるさ
休けり多れ塔の下陰
ことくさも妙も唱へるむの
精進 心を語く
享保十九甲寅九月十二日
真佐子より信作へ
のむらふは

後追の羽をかゆ(るき)ふ望の丁三
木者菴老鼠

葉の枝甲斐なるふろをり然歩月祭ろ
可容

秋は日や冷は去るふ新葉也れ

以葉を添木河さげてぬり始葉み

昔蕉翁と仰日又終を葉楊るふ
もなき大御自なる多し葉楊
よの狂無依の思ひかた葉楊る

枯壁のちまひいそ海原し葉楊夏の人
いぬめる秋とさふりみ葉楊れり

誰も又別とらうぬる暴負山れりふ

如渡得船

召れをも一葉ちりはく柳負陸うも

昂心昂佛とらふを

又月を道一すらを其樹かきみりふ

中階

せめし師の詠歌ある全ま初まを

り一人の袖へ泪の其畔や流るをく

ふ木甘んぢる雷水の葉や寂光士

落葉のつらみを二見の生巻が
秋の〜 夏腐てあるまゝと カ付ッ

河刀 和專

業三郎の主よ〜 長月の中
二日よあつちめは若士を
寶井の山よあつちめは若士を
弱の孫あまねし

夜雨庵

寸牛 蝸牛

破れあつち月あま芭蕉の日
惜おれあつちをほんのあつち木か
在ると思へ梨の筆 枕

有佐

あつちや皆く惜む新法研
葉の時宗匠病やあつちと
あつちしよとあつちしよと

緑水

あつちとけあや蘭の泣く〜
あつちやとけあや〜む葉の杖
族抄も真もあつちや葉の杖
世の口へあつちやあつちや
あつちやあつちやあつちや
あつちやあつちやあつちや

葉的 麟 鶴歩 負仙 山郭 志靜

華々畔の翁者よ葉十三折の
吟を誦ししことし或秋十二日
に世休辭しぬすお惜いふ
凡雅よあめし西の能因の
持神ありすを御術をば
きりぬる神とも宿林の
愁ある人界の業より
飛流る下るし又いふ合款書
百ヶ日の追憶の吟
九日葉十二日まの松うふ
は向られしとわあし
の句もあはす印て翁の終
吾を未來記ふちきりもの

未來記と
なごうおもへ菊
松
蓮谷

嘉禄

世に中よ長葉月十二日
三省

招歩巷より葉時の子を
歩歩るるを頼し

風の月尺跡よ人や跡の道
鳳翠

あせ

推の突も泪の玉も墓跡乃
全

葉時を

あまの葉の庭をありし夜
其條
長虹改
琴堂

小板秋やみ言を夜夏の片使り
 至的
 世の中よ玉姿和尚野望の家
 竺山
 暮らまわり錦の山花入り日新
 吟國
 胡芦餅のまじりを直まおれり
 有林
 残るやあ一句くま妙法華
 松閣
美木の二伊達際とあつもの
とまもも七花板のまじり
 物も木を深く度るや法恩寺
 黒己
 をゆめらもあまし梨の度あり
 其道

以名實謝師恩

うら植るそま露のまそ師花芝
 其耕
 月の入る板取馬も新しれ
 桑史
 酒一瓢自向となわぬ方の海
 左人
 惜しや人一板もあつて片月見
 紫蘭
（つるぎ）
青牛庵
 さなきたよ香の烟の秋暮るうみ
 妙翁
其人孫服せしむる也
おもひありや
 春若ぬる清しやる度時を日
 全

おそろとも山吹^らして泪^ら度^ら志^らく地
倫^ら序

収^ら業^ら叫^ら

さきく^ら浮^らの結^ら毛^らま^らら^らせて
貞^ら磨

袖^らの雨^らか^ら記^ら号^らあ^らり^らや^らこ^らお
旦^ら調

惜^らあ^らる^らや^ら日^らま^らい^らあ^らち^らむ^らき
蟻^ら城

幸^らく^ら畔^らの主^ら始^らる^らと^らあ^らら^らる^らや^ら
年^らと^ら中^らう^らも^らは^らひ^らの^らこ^らを^ら桂^らの^ら
の^ら日^らと^らも^ら酒^ら核^らと^らの^ら一^ら田^ら桂^ら
お^らま^らう^らこ^らい^らる^らも^らけ^らら^らと^ら伊^ら
破^らる^らす^らめ^らし^らも^らい^らく^らう^ら向^ら
の^らま^らと^らも^らな^らら^らぬ

は^ら稻^らせん^ら実^ら桂^ら嘲^らを^らか^らら^らる^ら
其^ら蒼

せ^らり^らや^らを^ら望^らよ^ら杉^ら名^らの^ら交^らあ^らる^らや^ら
青^ら壺

る^られ^ら一^ら夜^らと^ら死^ら出^らの^ら山^ら越^ら後^らの^ら力^ら
文^ら里

後^らの^らみ^ら能^ら梨^ら素^ら畔^ら貞^ら牙^らと^ら表^ら
玉^ら牙

手^ら向^らと^ら水^らへ^ら木^らも^らお^ら能^らち^らり^らぬ^ら能^ら
歩^ら閣

朝^らを^ら方^らの^ら一^ら群^らこ^らら^らる^ら何^られ^らん
宇^ら白

く^らや^らも^らの^ら強^らを^らと^ら母^ら奴^ら

秋^らち^らく^ら枯^らを^らを^ら志^らと^らふ^らと^らゆ^らめ
逸^ら志

茶井
茶の木の材木所を結ぶとけり

欠史をもとより大乗の一字
とてしることをしるおの御旨

羊素
於河内人も片瀬の州に於て

いつくのやまを以てしる
まゝもてしる一に業を時

松雨
酔とらんしるや柳の葉かられぬ

紙蚕
あこー路の燈をわすれぬ
予は彼をばめても人へ一時
は白の後のあしかりたり
越しうとくもむかひをけむ
越なごし

美花園主人
仇一郎の庭にあらわし種菊へ
鉦車

貞叟は
ほろこ好し
穿華梅

錦國
香の芳世に弱るや
砂糖
義水

圓推
親舟の綱もそれかり
義経の目

周野
ゆく秋を甲斐なふ
糸のさされ
新

燕佐
草も西木も
あされまな
おとろくや面白上戸
るよれを

五文字ハ土へ届く能兼作
枝朽の柿、あるも死出の山
世も惜しや淋る家も多し佛云
文長水石

ことしーいりちれと牛水壺の
三子うらつくと持素と時と人
も世を鎌吉は世のさば
ひり文眼さ免る

驚くやわさる世も子能所のす兼
厚の月十三日のものやまの
酒好のおさる世もや石佛
青峩里郷蓮之

序令叟の卒去りまの解る
ういもの志し後月と兼
時の懐も耳うわれま
わらあむむりとならぬ

冬九月廿木も所とおもひを
貞寫

兼時地利す

角さうてり角まーいふの木も兼
來川

萬畧夫
登集る代も兼

新築は器の鳴のころとわり
るうー記れまー兼の餅
半路尺

貞佐子久留城の世を時
了りて思ひにわたり
その名もなつては
あまほ中の代と
ゆき

蘭室

あまほ十三夜なる
世の月をたぐひ

惜む處一十二夜と
白粥のあはれ
あまほの
そ

貢橘
素丸
素尺
不残

稲をむむ
貞佐世を
あまほの
も

故一

雁を友は
あまほの
あまほの
あまほの

波登
調和

錦服を
あまほの
あまほの
あまほの

和推
杉風

築岡のありきききききき
 沈後の考なりききき
 活往一田忌のき向
 川とせしきききき
 中村素子まききき
 古人とまききき
 沈後の後
 一をききき
 事とてききき

鋤鱗
 隣田

其のききききき
 柳ちりききき
 かの國へき向のききき
 其のききききき

癡吻
 負暄
 松鼠
 泉
 不仙

二七日

其宗旨ハ酒をき向のききき

二七日

其畔

之七 若菜とゆへも枯るる家 全

四七〇

採花のころしう掃々墓のそ 全

初月忌

余日乃そんあさよ清原講 全

五七〇

ふあまのほろもはゆふ 五七輪 全

穉の根や泪のたのまのちう 千杵

雙香や始もあつちゆめの秋 山女曉

むさしのさきもあまの教も 長孝

白萩や葉のあまもくさくさむ 粟夫

花のほく名のいんちう夏の跡 仙株

惜いふあまのちうちう枯れも 玉甫

西へ入れ新のあまのあまの 其谷

り新やたむさびのあまのあまの 甘石

ちりぬとほろとさうとぬと
 もさうり屋のさうとぬと
 とく月をさうとぬと
 中へまきけし終末を恨そ
 こそい夜を枯野の葛みまをさ
 そ命をまよす待を東離解
 ばあふつたよりさうと翁物
 多向と鎌入鉢す尾むか
 惜む下へさあさ路も出離の日
 善の丸んげふよさぬ紫葳家
 今 露 月
 素 水
 長 漪
 如 英
 白 鷗

筆をまんろすれ白ハ母は
 うけらぬあまのむものも向物
 新物に尾をもももの入日ク那
 せよ唱も懐や度せん^{竟極}あむわ
 う結る 整是 自の安り也
 菱 水
 香 國
 梅 國
 青 葉
 木 十

奥も回字はれそ

ほ新日お枯りさあの群さしー
 木 昌
 むし原やの折るをよきも
 多とあさ師自綴の白く

薄きぬねをむき遊のむしり

名の木ちり材木町とありより繁

もどろくま旅ま一人や菜の杖

末の世にほの月人や晴りの句

大梅

米次 麟

月 可 候

月 摘 山

夕代を一生長月よきらま
御とほりまてを言子より又
るく世るくまのりし人
予は人の了我とわいむし
ゆり今国に居るくく四十
のまの回知くく又通止り
海泉のが又惜りか九月止る

あつはる向の句を

歌神おきてまらぬ

遙かより世を後小日を春おとめ

葉の葉よ残る雨や時雨

又セヨ

米次 柳舟

月 花舟

風のふくも白木卒ち時女家

月 観山

仇才超波子あやす
如夢幻泡影

ほろく遊く人新らあられ

山夕

まじまじくあやうき
そらぬまを多道の信よ

あ〜んと

此人を陶すぬ旅を片瀬の目
仙水

晋子、亭よりして停る
交りし日

月の門敲む〜海を渡るし
午寂

借札を産と牛や地を後の石
北川

海老村をまき
茶の畔に宿をらてれ
人を尋ねて
白粥一杯のさめぬ
のちのち

と舟をて道はあつて
樽川

おのふみお母あふゆ〜業師の日
文園

はるあやむをりなるとの園
英之

々あゝと酒の友あ〜十三夜
異川

九月十二日の病を
世の名をいふ
細い糸のつとめ
国にあらぬ

此人を〜角没〜及の月
柯木

おのふと〜りなるとの園
文車

病中物留りて一二月あるを
せめてこそをこころしくして
氷砂糖をこころしく入れし
とはこそみえたり

砕く水の斗砂糖も、度時 旬
尺ぬ月と匂ふ孫のや、二日

尾 告
安 士

幸く船きのめよ、月や露を
守りて、静かなる心とて、
身は、何とぞ

彼 圃へ、猿之、空、中、及、の、
亡師其角、川、入、り、と、

芦 鶴

せし、あ、り、二、枝、と、く、

く、く、く、く、く、く、く、く、
く、く、く、く、く、く、く、く、
く、く、く、く、く、く、く、く、
く、く、く、く、く、く、く、く、

く、く、く、く、く、く、く、く、
く、く、く、く、く、く、く、く、
く、く、く、く、く、く、く、く、
く、く、く、く、く、く、く、く、
く、く、く、く、く、く、く、く、
く、く、く、く、く、く、く、く、
く、く、く、く、く、く、く、く、
く、く、く、く、く、く、く、く、

丈 裳
尾 尺
芦 郷
壺 洲

初七日追薦

秋也日や七日はうりち後のも
洩も甲斐なま松うし月
菊令の葉うろき價を恥ぬむ
白羽二童のくやくしきよ
之つあゆむまゑの亥子のあま
葉そ の様程あつハ唐 松

其畔 越波 其蒼 有佐 可容 甄毫

音よ起こく矢や矧しんの櫛しハらなら反る
 娘むすめの奢おごむむいななん
 葛くわ糸いとももみみの扱あははにに中ちゆう
 四よつつ又またほほねねるる蒜しん葱そうの玉たま
 牛うし糸いとままるる糸いとをを告つるる又また浮う才さい
 少せうくく吊たふふニニ十十七七年ねん
 池いけ上うへハハ揚たのの下したくく名なりりきたきた
 小こ僧そうをを置おくく花はなのの房ぶどうをを合あふふ
 其其波波 有有佐佐 其其畔畔 其其蒼蒼

技ぎ借かでで新しんもも満まんるるよよ赤せきのの月げつ
 ハハ又またおおととああるる王わう餘よ魚ぎよをを踏ふむむ
 首くび少せうくく加か減げんををええるる昌昌 甲甲
 舞まいへへくく崎さき大だい内ない高たかふふのの危あぶ根ね
 武ぶああててハハおおああつつああるるのの奇き枕まくら
 白しろんんほほるるくく甲か季きのの際さい分ぶん
 浪なみ人ひとをを寺てらのの基もと盤ばんをを作つくりり付つけけけ
 蛭むしをを遊あそぶぶくく蛇へびへへ踏ふみみ込こめめ
 其其畔畔 有有佐佐 超超波波 其其蒼蒼

浮舟を吹よせしむる此艘 有佐
 大やま社乃由幣振ぬか 其蒼
 志の夕顔心もせよ甚もみ 其畔
 腰りけりたる傾城の内 可容
 くらゝ姿を醒はも思ふ患 超波
 連理の枝をよもつて物 有佐
 ④ 扇を引る窓のゝ 可容
 巴付しゝる毛足の上 役 其畔

おそりい口と思へと 有佐
 仙臺 吟 夢をきく散 超波
 夕と空のいとほしき記音は夜 其蒼
 連気 くらり柳を連気師の牛 有佐
 むろ 笛を吹きほろふ 其畔
 輪 くらり 燈をみよ 其蒼

二七日

日向あらし木の突松をむいさうらそ
死をふを告る湘伽のあ筋
月の友危り腮をめあささ
三けと菜とあるまらき
席書の虎とふ子八尾をくもる
形をうや軍雑のちり

黒已 超波 其樹 菜揚 至的 有佐

省の名よ句狎なくも石菜あ
口つとれ賽の敷多きり
其の方おろめ菜のむし思子ん
楊一ツも志角りの世や
島守の外とすれを岐
敗毒散も口をとあ方
前陰師子廓へ前よは乃餘
捲くさの道六道の鐘

超波 其樹 有佐 黒已 菜揚 至的 黒已 有佐

車井や月と釣瓶のあやを
負 軍うは 飯もよく
貞室の詞もむのあきく
夕日 秋をさむ 夜あ二す
名 春あゆみ 柳の帽子も
幸と 近 人 さんあ 知 臨うけ
長生の山庄お又 巻もせ
ことあはれ 志あはれ 下戸の集り

其樹 超波 至的 業揚 有佐 黒已 超波 其樹

枯枝へ 海をさる 星 影み
七 墓 糸 皆ハ 也
顔 典 天のあ 一 影 也
め ちみ を 深 家 志の 馬 中
い おろし 春 葉の 苗 影 也
茄子の 白 小 葉 乃 上 於
玉 兔 晝 上 杵 也 心 乃 也
清の 船 を 石 一 研 也

業揚 至的 有佐 黒已 超波 其樹 至的 業揚

上嵯峨さうせをさるる儀 米
岡一投ぬむ 杉木の錢
又耶親の病をさるる 這上り
管白能白よるま魚の目
三台のたぬま之日のたるるも
と千もぬぬに法乃 轉

有佐
至的
超波
黒已
糸楊
其樹

三七日

山茶毒やれす等の鐘をさるるつ
冬茶葉のたれをさるる儀
符帳付茶葉の中へ茶をさるる
店屋二人のさるる儀
出まぬ月 乾ぬらわぬと山と里
奇 藤よ羽うつアの下り際

千尺
超波
桑也
坂閣
玉牙
其耕

胡ノ餅ヨ日蓮宗ノ口苦ヲ
 者リ取レテ推シ舟ヲ
 聳入ト姑メトノ強ヲ
 非代ノ口ヲをばせし合
 子ノ研アミヲ能研ハ遠シ
 木馬ノをよム系師ノ正居
 物瓶縄アサレト也ヨ月白
 子ト女ヲハユ人ノ上

歩閣
 五牙
 超波
 千尺
 其耕
 菜也
 千尺
 超波

徒ノ系アミ出ル苗ノ麻寺
 曲物焚カカシ火輪也
 集ヲ中々々々河酒ニ破セリ
 精ノ枝ニ月ノ相ヲ
 去レテ也
 師ノ者モハ官町ニ居
 藤ノ魚トシカモ其友

葉也
 其耕
 歩閣
 玉牙
 其耕
 菜也
 超波
 千尺

傍^ウホ^ウ右^ウの^ウお^ウ松^ウ根^ウも^ウ海^ウふ
 忽^ウれ^ウと^ウ世^ウお^ウき^ウ忽^ウほ^ウ一^ウ歩^ウ
 己^ウの^ウ刻^ウ其^ウ目^ウは^ウた^ウる^ウや^ウ報^ウ金^ウを
 願^ウは^ウ喉^ウ飽^ウる^ウ雀^ウぬ^ウれ^ウる^ウ
 貧^ウ僧^ウの^ウ鼻^ウ毎^ウ通^ウる^ウ藪^ウの^ウ霜^ウ
 交^ウこ^ウ裁^ウ一^ウま^ウる^ウる^ウ後^ウの^ウ心^ウこ
 漕^ウあ^ウる^ウ船^ウは^ウた^ウる^ウき^ウる^ウき^ウる^ウ
 又^ウ引^ウ綱^ウと^ウ一^ウの^ウう^ウる^ウ株^ウ柳^ウ
 玉^ウ牙^ウ 超^ウ波^ウ 千^ウ尺^ウ 其^ウ耕^ウ 菜^ウ也^ウ 步^ウ閑^ウ

店^ウ中^ウの^ウ陣^ウ吹^ウは^ウ鼓^ウう^ウけ
 是^ウ悟^ウ極^ウる^ウ尼^ウ寺^ウの^ウ夏^ウ
 振^ウ袖^ウの^ウ替^ウ女^ウむ^ウる^ウき^ウ緋^ウ緒^ウ緬^ウ
 祈^ウ状^ウる^ウる^ウ純^ウを^ウ向^ウ白^ウい^ウと^ウ甲^ウ
 枝^ウの^ウた^ウむ^ウ輪^ウ蹴^ウ落^ウる^ウ毛^ウの^ウ馬^ウ
 お^ウそ^ウこ^ウよ^ウき^ウれ^ウる^ウる^ウ菜^ウ其^ウ水^ウ際^ウ
 玉^ウ牙^ウ 超^ウ波^ウ 千^ウ尺^ウ 其^ウ耕^ウ 菜^ウ也^ウ 步^ウ閑^ウ

止師律をいふは其の居りし
 透る体いしめけとて丁控
 画の二双ありて其屏の松竹の
 ありきよはけりしをいふ
 とけは若き子の吟は能く
 いろあはれありしとて
 中さし作てことし
 の若きたるをいふは
 を獨り居るをいふは
 五條の松竹をいふは
 とて松竹のありしをいふは
 安んずるをいふは
 生かぬもの一可の
 死なぬものは
 此れの世界に師をいふは

ちやうあやとあはれ物
 くる紅床ともいふ

り秋のかきかき松の
 実よひよりのことほれ

要圓樂
 有佐
 超波

仰のふたねおきよとあ
 としとちよとちよと
 むらみあはれをいふ
 の肉屏ともいふは
 たまひて存するをいふ
 きりい有依りかき
 芦ふたねをいふは
 のあはれをいふは

みまごころあり

夏に世を屏ゆればおまが 超波

百箇日

百ヶ日位も流れぬ阿もころゝ 超波

まのふ竹乃平安を問わもふ
雪のふみ折まのふ貞徳の
平安を問わ食のんどみりて
日此の酒をゆもくささー唯
介郎餅羊羹のこ後の日
問わ顔色憔悴し菜あり

疎とらるゝあはれとて竹の
身仇雪折ましくも待たず
寅の九月十二日子雨とありぬ
との悲し昔合歡堂餘花
千句の會ひ此叟夕顔塚を
清厄介那乃句しと悔りぬ

朽ぬし晋子ありと余も悟る
か糸句の才あはれとて席へ暖
あまきと惜しむ晋子世に
あまきの後江都にとまらぬ
人しく才を愛しとまらぬ
あまきと惜しむ其才惜しむとて

かくり


一鳩林午寂跋

享保二十年二月日
江戸日本橋
萬屋清兵衛藏

俳諧書目録

松葉軒壽梓

類 棋 子	三 冊	隻 尾 琴	三 冊
後 餘 花 十 百 句	二 冊	三 上 吟	一 冊
代 し り し	五 冊	續 の し	二 冊
俳 度 曲	二 冊	百 福 壽	二 冊
續 江 戸 の し	二 冊	續 福 壽	二 冊
詠 太 序	二 冊	百 花 實	二 冊
花 擔 筆	二 冊	し の し	二 冊
氏 中 の し	三 冊	倉 の 衆	三 冊

				をいぢ書表	梨乃菌	江戸後八百韻	箴の花	江戸名所集
				一冊		一冊	二冊	三冊
						初懐帛	或問珍	夢想安あき
						一冊	一冊	一冊

Faint handwritten text in a cursive script, likely Chinese, arranged in approximately six horizontal lines. The ink is light and the characters are difficult to decipher.

Faint handwritten text in a cursive script, likely Chinese, arranged in approximately six horizontal lines. The ink is light and the characters are difficult to decipher.